

は、一つの領域としてまとまった国家ではない。少なくとも2つの中心から、外界に向かうネットワークとしてのみ、存在していた。

このネットワークを構成するルートは、地形によって決定されるもので、16世紀以来、以下の6つが確認できる。

1. メコン上流水路—ラオへの道
2. メコン下流水路—南シナ海への道、シャム湾への道、ベトナムへの道
3. トンレサープ水路
4. トンレサープ南西岸陸路—シャムへの道
5. タケオ地方縦断陸路—シャム湾への道
6. シャム湾岸海路—シャムとベトナムを繋ぐ道

以上のルートをネットワークとして束ねる2つの中心の1つは、ルート3.4.5.の要となるトンレサープ西岸のロンヴェークおよびウドンであり、もう1つは、ルート1.2.の要となるメコン河東岸のスレイサントーである。この他、18世紀のシャム湾東岸には、ハーティエンを中心とした華人主宰のネットワークが姿を現わす。

17世紀後半には、ベトナムに支援されたスレイサントーの勢力と、シャムに支援されたウドンの勢力が、プノンペンとその対岸、ロヴィエアエムとチュローイチョンワーで対峙した。17世紀末にスレイサントー勢力が消滅すると、メコン下流水路を制したベトナムは、トンレサープ水系に進出し、18世紀から19世紀前半まで、ポーサットにおいて、トンレサープ南西岸陸路を制するシャム軍と直接対峙する。シャム湾岸では、18世紀後半にはハーティエン勢力が、19世紀前半にはベトナム勢力が、シャム海軍と直接に対峙するようになる。

アン・ドゥオン王は、1840年代前半に、シャム軍にエスコートされて、トンレサープ南西岸陸路経由でカンボジアに帰国した。1845年にウドンで決戦があり、シャムとベトナムの間で和平が成立し、1847年にアン・ドゥオン王が即位する。アン・ドゥオン王の手には、シャム・ベトナムの陸の最前線ポーサット、海の最前線コムポートが残された。

アン・ドゥオン王は16世紀以来のシャム軍の侵入路を、ポーサット—ウドン—コムポート線を主軸とする一つのネットワークに作り変えた。この点で、アン・ドゥオン王の王国再建プランの第一は、メコンに拠らないカンボジアの確保であったと言える。その上で、このポーサット—ウドン—コムポート線は、ウドン—コムボン・ルオンの道、ウドン—プノンペンの道によって、トンレサープ水系、メコン水系に接続される。アン・ドゥオン王は、シャムの政治空間とベトナムの政治空間の間の回廊に、ウドン—コムポートを中心軸とする単一のシステムを作り上げた。

ベトナム前近代の支配空間と地誌記述—西北山地を中心に—

嶋尾稔

ベトナムにおいて、ボーダーラインで仕切られた国土が地図に描かれ、そのかたちを人々が認知し、さらには、それを愛国心の対象と見なす記述が現れるのはおそらく植民地(保護国)体制が確立した20世紀に入ってからのことである(1899年インドシナ地理部、『南国地輿』序文1908年)。タイにおいては、近代的国土をめぐる言説が「領土喪失」の「歴史的記憶」を伴うのに対して、保護国ベトナムの地誌記述では、あるべき国土が歴史的に形成された国土を継承するものとして描かれている。その背景として、他の東南アジア大陸部の諸王

国と異なり、ベトナム王朝が、遅くとも15世紀には、明確な版図の意識を持ち、それを県や州といった行政単位の集合体と認識し、国土に隣接する地方を明確に把握し、地誌や地図に記述してきた点(『洪徳版図』)をすぐに指摘できよう。ここでは、18世紀末から19世紀にかけてベトナムの国土の記述について検討する。

1. 州・県の集合体の外延が拡大し、ほぼ現在の国土と重なるのは、1830年代、阮朝のミンマン帝時代の後半になってからのことである。ミンマン帝は、フエを国土の中心として確定し、長らく分裂していた南北の空間の支配を一元化した。また、国土の視覚化(各地の「絵図」)や実証的な把握(北極高度、風雨尺・寒暑尺)を目指した。1838年に中国古代の禹に倣って王朝の宝器として九つの鼎を鑄造させたが、これには、北から南までの国土の山川や物産が描かれた。同年、ミンマン帝は、この新たな国土を「大南」と名付けている。1882年によりやく草稿の完成した『大南一統志』は、この国土の省、州・県を隈無く記述しようとするものであった。

2. 「大南」の隣接地の記述について見ると(1861年『大南一統輿圖』)、中部高原のフロンティアでは隣接する国があいまいである(「蛮洞」)のに対して、西北山地を含む他のフロンティアでは隣接する国に関する意識が明確である(北方では「清國」、西方は「南掌」「暹羅」「高蛮」)。植民地化直後に阮朝が編纂した『大南國疆界彙編』七卷(1886-1888年)にも同様の認識が見られる。

3. 西北山地のシブソンチュータイの地域には、15世紀には州と県が設置されており、18世紀にはベトナム王朝の中国に対する明確な領土的主張も見られる(失地回復要求)。しかし、18世紀末の『興化處風土録』(1778年)は、西北山地が、州・県の枠組みを形式的に受け入れながらも、実際には輔導とよばれるタイ系の首長層の固有の支配空間であり、ベトナムとは別の地域世界(哀牢)に属することを明確に記述している。ミンマン期に始まった州・県へのベト族官吏の派遣(改土帰流)は、州・県という支配の枠組みの強化を目指すものであったが、1844年にはその弊害が指摘され、1869年には停止されている。1860年代には匪賊層が跋扈する中、白タイ族デオ氏が台頭し、既に南圻を失っていた「大南」の国土は西北山地でも危機を露呈した。1888年、奠辺府(ディエンビエンフー)からタイを追い出したフランスは、パヴィイを派遣してデオ氏と結び、シブソンチュータイを獲得する。シブソンチュータイの植民地トンキンへの帰属を決定づけたのは、デオ氏であった。『大南一統志』は、『興化處風土録』を全面的に引用することによって、国土の周辺の実態を間接的に記述している。

資料・研究短報

アイルランガ王碑文の怪—プララヤは1006年か1016年か—

深見純生

カルカッタの考古学の博物館に19世紀初めのイギリス支配下のジャワからもたらされた一個の大きな石碑があるという。高さは124cm、幅は上部で95cm、下部で86cm、表面には37行34詩節のサンスクリット韻文、裏面には45行のジャワ語散文が刻まれている。アイルランガ王(在位1019～42年)の発したものであり、インドネシア史の叙述ではカルカッタス